

「景気を把握する新しい指数（一致指数）」の精度の検証と諸課題の検討

研究の視点：「景気を把握する新しい指数（一致指数）」は経済の総体量を捉えているか？

音田裕次郎（内閣府経済社会総合研究所国民経済計算部国民資産課（元内閣府経済社会総合研究所景気統計部））

「景気を把握する新しい指数（一致指数）」とは

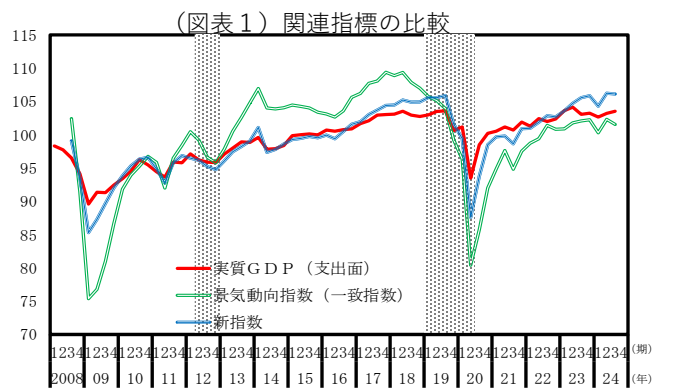
- 内閣府経済社会総合研究所（ESRI）では、景気の現状把握及び将来予測に資するため、1960年8月から「景気動向指数」を公表している。
- 近年、サービス産業化や経済のグローバル化といった経済の構造変化が進む中、景気動向指数の抜本的な見直しの必要が認識されたことから、ESRIでは新たに、「景気を把握する新しい指数（一致指数）」を開発し、2022年8月から参考指標として公表を開始した。（以下「新指数」）
- 経済の共通的な変動を抽出することを目的とした現行の景気動向指数に対し、新指数は、経済の総体的な量（総体量）の変動を捉えることに重きを置いている。

※新指数及び関連指標の動向は右下の図表1を参照（指数の基準年が水準に与える影響を除くため、本稿では、2015=100とした指数から一部調整を行っている。）。

本稿における調査研究の概要

新指数の公表開始から一定のデータが蓄積されており、本稿では、以下のとおり調査研究を行った。

- ①推計精度の改善策の検討
 - 新指数と同様に経済の総体量の変動を捉えていると考えられる実質GDPなどSNAの各指標を、新指数の概念に合うように、経済の総体量の変動を捉える指標として適切に加工した上、新指数と比較することで、現状の推計精度を確認し、改善案の検討と試算を実施。
- ②公表早期化に向けた検討 ※詳細は本稿参照
 - 財務省「営業利益」
 - 経済産業省「第三次産業活動指数」の代替を検討。
- ③ウェイト更新の検討 ※詳細は本稿参照
 - 総務省「2020年産業連関表」を踏まえたウェイト更新の試算。

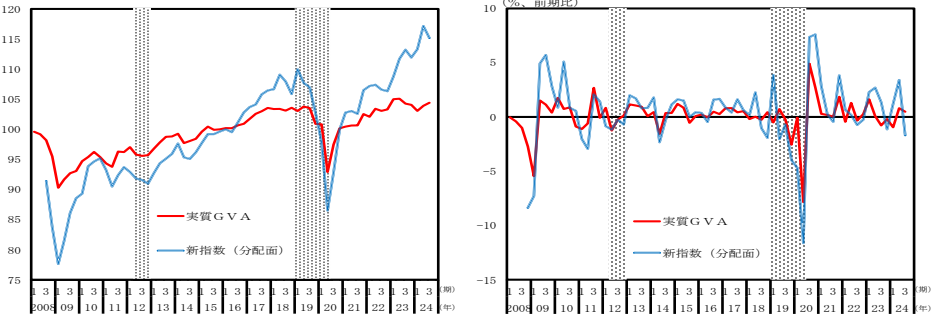


「景気を把握する新しい指数（一致指数）」の精度の検証と諸課題の検討

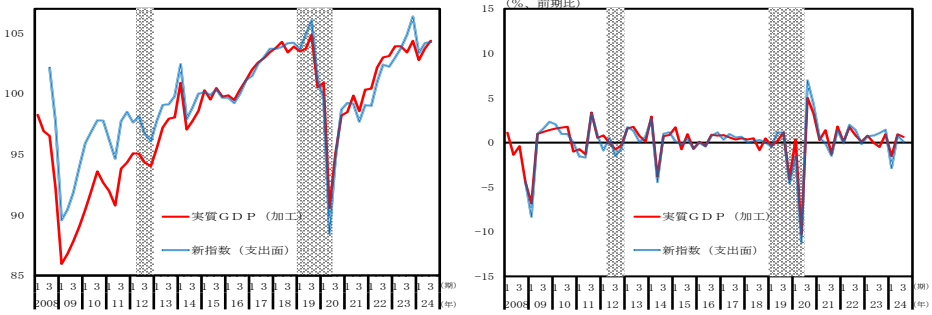
主な結果（①精度の改善）

- 新指数とSNAの各指標を比較すると、足元（2018年前後、2023年以降）において動向に乖離がみられている。乖離の要因を確認するため、新指数における三面（生産面・支出面・分配面）と、新指数に合わせて加工したSNAにおける三面を比較したところ、特に、分配面と支出面の精度に課題がみられた（図表2、3）。
- ※課題として、例えば、分配面における「営業利益」の実質化や純粋持株会社の売上高控除が挙げられる。支出面においては、構成指標の精緻化の必要がみられた。
- 各指標において、名目値の実質化や概念の精査を行い、改定案を試算したところ、一定程度の改善がみられる結果となった（図表4）。
- 引き続き検討すべき課題は残るものの、本稿での改定案は改善の一案として考えられる。

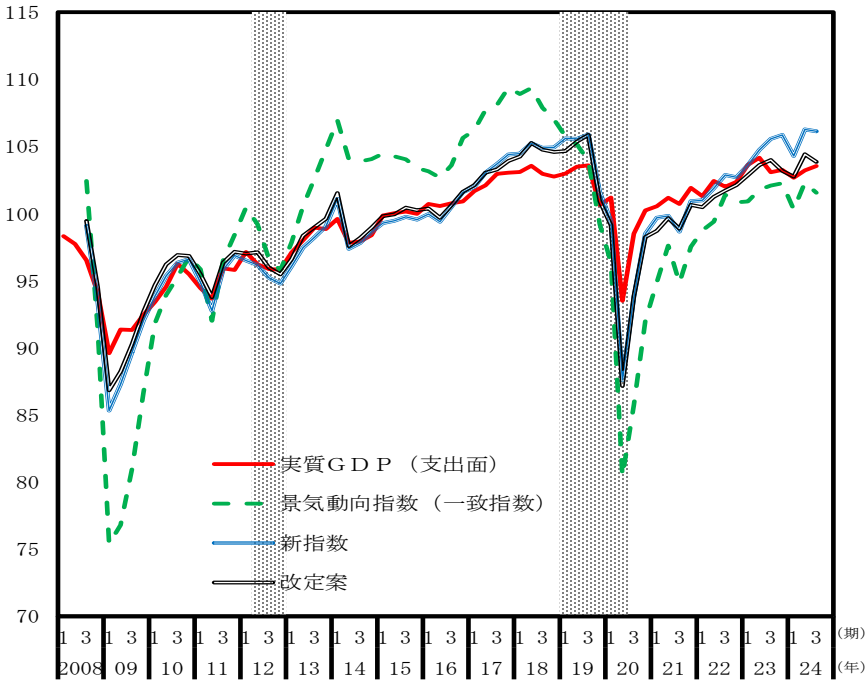
（図表2）分配面の比較（左図は水準、右図は伸び率）



（図表3）支出面の比較（左図は水準、右図は伸び率）



（図表4）精緻化結果



（備考） 1. GVAは経済活動別付加価値額の合計を示す。実質GDP（加工）は、実質GDP（支出面）を新指数（支出面）の概念と合うように組み替えて加工している。
2. 図表は、内閣府「景気動向指数」、「景気を把握する新しい指数（一致指数）」、「国民経済計算」等により作成。